

その熱さを粘膜に感じ、美紅は悩ましげに腰を動かした。その途端、つつつと一筋の蜜が二人の触れ合った部分からこぼれ落ちると、シーツに新しい沁みを作り、彼女の膝が当たっている箇所新たな皺しわが刻みこまれる。

真人は、しっかりと義姉の腰を抱えこむと腰を奥へと進めた。

「つつつ、んうううううつ!？」

照明を反射して鈍く光る刀身が、美紅のなかへ再び侵入をはじめ。

後ろから貫かれるのは、前からとはまた違った感覚を彼女にもたらず。

実際よりもひとまわりも太い灼熱の棒が、より深くに挿入されるように感じる。

「あああ……まーくんが奥まで……」

背筋を反らしながら、美紅は甘い声をあげる。

そんな彼女を上から見ると、柔らかなおっぱいがベッドに押しつぶされて、その端がはみでているのが確認できる。

きゅつと引き締まったウエストからは豊かに張った臀部が突きだされている。

そして、そのたつぷりとしたヒップの下の秘唇に、真人自身が突き刺さっている様子があますることなく確認できるのだ。

たちまち、真人は乱暴に本能の赴おもむくまま、腰を何度も打ちつけて義姉を存分に攻め



あ...

あッ

はあッ

たいという強烈な衝動に駆られた。

一度腰を大きく引くと、真人は彼女の腰に手を当てて、思いつきり奥を穿^{うが}った。「つきやあああつ！ あああああ……んああ……」

突然の攻撃に、美紅はシーツをぎゅつと握りしめ悲鳴をあげた。

真人はひるまずに、何度も何度も腰を振りたてては美紅を激しく犯しはじめた。

「んっ、はっ、はあ、はっ、ああああ……すごすぎ……んあああつ！」

ぱんぱんと小気味良い音と接合部分が激しく擦れ合う水音とが部屋に響き渡る。

自分が自分でなくなってしまうような、強烈な快感に美紅は身をゆだねる。

義弟のピストン運動はどんどんと激しくなり、美紅の意識は何度も飛びそうになつてしまう。

「ん、あああ、ああ、はああ……もつと、もつとお……めちゃくちやにい、まーくん。お願い……」

激しい愉悦の最中、美紅の口から淫らなセリフが紡^{つむ}ぎだされる。

それは無意識のうちに、ついて出た言葉で、美紅自身も驚いていた。

(ど、どうしちゃったの。こ、こんな、恥ずかしいこと……)

理性を取り戻そうと思うものの、真人の熱烈な愛撫はその隙をまったく与えない。

そして、美紅が乱れば乱れるほど、真人の動きは獣じみてくる。

身体が激しく前後に揺さぶられ、そのたびに美紅は高い喘ぎ声で啼く。

姉弟だからとか、禁忌とか、今、二人にとってそういうことは関係なかった。

強烈な快楽の前には、二人はただの男と女にすぎない。

すべてのしがらみから解放され、二人はただひたすらに互いへの熱い思いに身をゆだね、情熱的に交わっていた。

「んっ、も、つもおおお、ああっあああ、壊れちゃうううっ！」

じきに美紅が大きく震えると、ひとときわ高い声をあげた。

「美紅ねえ、はあ、はああ、壊れちゃって、いいよっ！」

同時に真人は渾身の力をこめて、義姉の腰を思いつきり強く引き寄せると、自らを彼女の子宮の奥深くに激しく叩きこんだ。

熱い衝動が真人の下半身を襲い、彼女の体内でどくと肉竿が勢いよく跳ねた。

「んう、んああああああ……」

二人の結合部分から、愛蜜と精液とが混ざり合った乳白色の液体が漏れた。

「も、う……ほんとに、だめなんだ、からあ……」

ぼつぼつと言葉を区切りながら、かすれた声でそう言うと、美紅はベッドに身体を

預けきつて目を閉じた。

「美紅ねえ?……」

ぴくりとも動かなくなつた義姉を心配そうに見おろす真人。

美紅のなかから自らを引き抜くと、義姉をあお向けにした。

やはりくたりとしたまま、まったく動かない。

だが、胸がかすかに上下しているのに気がつき、真人はほっと胸を撫でおろす。

どうやら、あまりにも激しい性交のせいで気を失ってしまったようだ。

じきにすうすうという寝息が義姉から聞こえた。

真人は美紅に布団をかぶせると、シャワーを浴びようと立ちあがろうとした。

と、そのときだった。

「だ、めえ……」

美紅がそう言うのと、真人の手を握りしめたのだ。

「大丈夫。シャワー浴びにいつてくるだけだから」

真人がそう答えるが、美紅はけして手を離そうとはしない。

「だ、めえ。まーくん、傍にいて……今だけは……」

「え……」

むにゃむにゃと寝言のように言いながら真人を引きとめる美紅。

彼女の言葉が気になって、真人はその意味を問いただそうとする。

が、彼女はまたすぐに目を閉じ、すうすうと寝息をたてはじめた。

かすかな不安を覚えつつ、真人は彼女が完全に寝つくまで、義姉の頭を何度も何度も優しく撫でてやるのだった。

「今だけじゃないよ。ずっと傍にいるよ……」

そう言わずにはいられなかった。言い知れない不安をごまかすかのように……。

真人は、いとしさに満ちた暖かい目で、自分だけの義姉をじっと見つめる。

この幸せなひとときは、ずっとつづくかに思われた。

もちろん、そんなはずはないけれど。

愛や恋というものは、永遠なんてないと重々承知している人にすら、思わず永遠を信じさせてしまうおかしなものなのだ。

このときの真人も、永遠を信じて疑ってはいなかった。

そう。次の日の朝、義姉が義弟に残した手紙を見つけるまでは……。